

川
端
康
成
の
夕
映
え

村
井
英
雄

一九七二（昭和四十七）年一月二十一日夕刻、川端康成は、奈良県桜井市三輪の井寺池堤の高台から、みはるかす落日にむかって茫然と立ちつづけていた。夕日は、川端の立っている所から奈良盆地をはさんで、真正面の二上山のわずか南に朱色に燃えて沈んでゆく。日が没するまで約十分間。川端はみじろぎもせず沈む夕日に見入っていた。

川端が対峙していた二上山は、奈良県北葛城郡當麻町の西端から南につらなる金剛山地のどっかかりにある。万葉集に、悲劇的な死をとげた天津皇子を山頂に葬った、と歌われている山である。古くは「ふたかみやま」と呼ばれた。川端の立っている井寺池堤から直線距離にして約二十キロメートルである。また二上山は大和（奈良県）と河内（大阪府）の国境をなしていて、山頂は雄岳（標高五一五メートル）と雌岳（四七四メートル）の二つの峰に分かれている。頂と頂の間は徒歩で約二十分。遠くから山容を眺めると、二つこぶの駱駝のように、あるいは、馬の鞍のような格好をしている。二上山という名前はここから生まれた。もとは火山で、瀬戸内火山帯に属する死火山である。山膚は深く濃い緑に覆われていて、どこか神秘的な面持ちがあり、大和の山々の中でもひととき秀麗な形をしていることで知られる。

実際に二上山は、奈良時代から神秘性を帯びはじめた。春分の日と秋分の日、大和盆地から見、峰の鞍部に夕日が落ちるからである。落ちる日の姿が人智を超える不思議さを人々に感じさせたのだらう。落日信仰も起

こった。世が像法の時代から末法の時代（二〇五二年）に入って、人々が生の苦悩を感じるようになると、その苦悩からの救済を仏に願う気持が高まって、二上山の鞍部から阿弥陀仏が人間界を覗き見る「山越の阿弥陀仏」が誕生した。人々は落日する二上山の遙か彼方に西方浄土を見たのである。この時点から二上山は死と密接な山となった。折口信夫が小説『死者の書』で、黄泉の世界にいる大津皇子を甦らせるおどろおどろしい世界を描き得たのも、死の雰囲気濃厚に漂う二上山が舞台だったからといえる。

川端が立っていた位置から二上山は、真西からわずかに南に寄っている。日が一月二十一日の夕刻なので、太陽は春分の日、真西から西南西にずれて落ちる（奈良地方気象台）。二上山の鞍部からやや南の山の端である。川端のいる井寺池堤は、三輪山（四六七メートル）のなだらかな稜線が奈良盆地の中央に向かって降りる標高一三〇メートルほどの高さにあるから、川端は二上山をほぼ目の高さに見ていたことになる。

この時の川端の様子について、一緒に現場へ行った、桜井市商工観光課長だった故米田一郎は、

「この日、奈良は真冬にしては珍しいほか陽気の日でした。しかし、夕刻になると山の麓でもありますし、次第に冷え込んできて風も少し出てきていました。先生（川端）は風に髪の毛を吹かせまま、二上山辺りに沈む夕日に、じっと目をやったまま身動きひとつされませんでした。視線は日に向かっているのですが、横から見ていますと、なんだか遠い世界を見ておられるような気がしました。おごそかな横顔でした。風邪をひかれてはと心配をしたのですが、先生の全身にただよっている厳しいというか、何人をも寄せつけない雰囲気があって、声をかけることはできませんでした。そのまま先生が見終わられるまで待ちました。十分間くらいだったでしょうか。先生がその時この世の人でないような気がしました」

と、筆者に語った。

人が自然の織りなす壮大な情景に心奪われて茫然とするのは珍しい話ではない。川端も夕日に見とれてなんら不思議ではない。しかし米田は「普通の人ではありませんでした」と話している。「人という感じがしなかった」というのが、夕日に見入る川端に対する米田の印象だった。川端は容貌が厳しいとよく評されるが、この時の川端は全身に近寄り難い何かをただよわせていたようだった。

川端は、黒のマフラーにオーバー姿だった。両手をねずみ色オーバーのポケットに入れていた。川端の視線はどこに定められていたのか。米田は視線を横から追ったが「分からなかった」。

この日から約三ヶ月後、川端は不帰の客となる。四月十六日夕に自殺するのである。

二

川端が奈良を訪れたのは一月二十日だった。奈良県高市郡明日香村の飛鳥保存のために作られた飛鳥保存財団（理事長・松下幸之助松下電器会長＝当時）の理事に就任していた川端は、同財団が初事業として明日香村越の近鉄飛鳥駅前に建設する飛鳥総合案内所の起工式に出席するため、ひとりで奈良にきて奈良ホテルに宿泊していた。飛鳥保存財団は「日本人の心のふるさと飛鳥を守れ」という国民の間にあがった声を受けて設立された財団である。川端は前年秋に理事になって、関係者の話では、月一回の理事会にこまめに出席して、飛鳥保存の青写真作りに参画していた。起工式（二十一日）翌日の毎日新聞によると、川端は鎌倉から式にかけつけ、「美意識を持って自然

の保護と創造を進めてゆきたい」と話し、「飛鳥」（一字ずつ書いた二枚の画用紙）と「明日香」（三枚）の計五枚の自筆の画用紙を渡して、案内所が「完成したら私の一筆を掲げてほしい」といったと報道している（この「飛鳥」「明日香」の書については、「大和タイムス」紙は、「二つの呼び名を揮毫、額にして同案内所へ掲げることにした」と報道している。現在は額装されて、飛鳥保存財団事務所に「飛鳥」、研修宿泊所に「明日香」が掲げられている。書は起工式当日、事務所で川端が書いたものである）。

また、起工式の様子について朝日新聞は、「自然の保存と創造を」「飛鳥総合案内所起工」「式に川端氏ら出席」との見出しを掲げて、式には川端のほか文化庁、建設省、地元工事関係者ら約百人が出席。川端は「明日香村もやがて明日香町になるだろう。自然は保護する一方で、創造もしなければならない。奈良の都も人間がつくった。美意識を持って自然の保存と創造を進めていきたい」と挨拶したと報じている。

飛鳥総合案内所は、鉄骨木造二階建て延べ百九十三平方メートル。白壁に黒瓦を使った大和民家風造りで、一階が案内コーナー、中二階が飛鳥の資料室、二階が休憩室とサロン（現在は改築、一階吹抜けになっている）。総工費千八百万円で、翌四十八年三月十五日完成し、開所式が行われた。

新聞は、川端が式に「ひとりで鎌倉から駆けつけ」と書いているが、起工式は午前十一時から行われている。奈良ホテルから式場へ直行したようだ。川端は「明日香村の保存になみなみならない関心を抱いていた」（岸下利一・元明日香村長）という。ちなみにその後の考古学ブームの火付け役となった明日香村の高松塚古墳から極彩色の壁画が発見されるのは、起工式から約二ヶ月後の三月二十六日である。

起工式に出席した後、川端は、出迎えの桜井市差し回しの車に乗って桜井市役所へ向かった。桜井市が計画し

ていた「山辺の道万葉歌碑」の建立場所を下見するためである。川端の選んだ万葉歌碑の建立場所決定が桜井市訪問の目的だった。桜井市役所の市長室では桜井市出身の文芸評論家で作家の保田與重郎と市長の池田栄三郎が待っていた。テーブルの上には幕の内弁当が昼食用に置かれていた。

川端と親交の深かった保田が桜井市役所で川端を待ったのにはいきさつがあった。保田は「彌生の三日月」（『新潮 川端康成読本六月臨時増刊』昭和四十七年六月二十日発行）で次のようにその理由を書いている。

今年は正月中に一度鎌倉（川端の自宅¹¹筆者）へおうかがいしようと、その月日まで約したところ、急に他用も出来たから、桜井であはうとのたよりあつて、一月二十一日ひるすぎ、先生と桜井の市役所で出会つた。

保田と川端が鎌倉で会う約束をしていた日は一月十六日だったという。（この日については、川端の「有由有縁」の文字碑が忠臣蔵で知られる東京・泉岳寺境内の慈航観音堂にあり、その文字碑の元になった「有由有縁」の書に「一月十六日康成」の署名がある。保田と会う予定をしていた十六日に川端がこの書を自宅で書いていたとすると、「急に他用も出来たから」という用は、飛鳥総合案内所の起工式を指すとも考えられる。一説には飛鳥での起工式は以前から決まっていた話なので、ほかに急用ができたのではないかといわれる。）

桜井市の万葉歌碑建立計画は、同市の山の辺の道沿いに、万葉集にちなんだ歌碑を三十基（後に増えて百基）建てようというもので、それぞれの万葉歌は作家や画家、学者らに選んでもらうことになっていた。その最初の人物に川端が選ばれ、市長の池田が前年八月に川端の鎌倉の自宅を訪れて依頼、快諾を得ていた。その時、川端は武者小路実篤や堀口大学など知人を積極的に紹介したという。池田が万葉歌碑建立の最初の人に川端を選んだのは、川端と親しかった保田の助言があったからである。保田は京都市右京区太秦三尾町（鳴滝）に住んで文学評論など

批評活動をしていた。保田の亡くなつたいまは、身余堂と名づけられた自宅に妻で歌人の典子が守っているが、川端は保田のこの家を訪れたこともある仲だった。川端は東大で専攻は異なるが保田の先輩でもある。

筆者が調べたところ、川端はこの日、明日香村越の飛鳥案内所の起工式に出席したあと、桜井市山田の山田寺跡を見てから市役所に向かっている。明日香村へ川端を迎えに行ったのは、米田と車の運転をしていた市職員である。

山田寺は、『上宮聖徳法王帝説』によると、舒明天皇十三（六四一）年に、「乙巳の変」（六四五年）の立役者の一人、蘇我倉山田石川麻呂が浄土寺を建てるために土地造成を行い四十二年後に完成した寺である。いまは当時の面影はほとんどない。金堂や講堂跡の礎石が残るだけで、小さな観音堂がぼつんと建っている。そんな山田寺跡を見て抱いた川端の感想は不明である。「何もおっしゃらなかった」（米田）というから感慨はなかったのかもしれない。

しかし、川端はこの時、奇妙な言動を見せたという。一般の人が奇異に思う言動をしたというのである。川端の自殺後、川端は晩年に精神的に不安定だった。奇異な言動をしたという話が文学関係者の間に徘徊したが、山田寺で見せた川端の言動もその話のひとつになるひとつだった。しかし、川端は本当におかしかったのか。以下に事実だけを記す。

山田寺跡には「石川麻呂雪冤の碑」という石碑がある。川端はこの碑の文字に見入った。碑の「雪」は「すすぐ」、「冤」は「ぬれぎぬ」という意味である。石川麻呂は『日本書紀』孝徳天皇大化五年三月の条に、異母弟日向により、皇太子中大兄の殺害を計画していると讒言され、難波から山田寺に入って、妻子とともに自害したと

記されている。皇太子中大兄の殺害計画は後に冤罪と分かるが、碑はその冤罪をそぐために建てられた記念碑だった。碑文によると、碑は石川麻呂の末裔という越前粟田郡の山田重貞が天保十二年、建立し、文字は幕末の南画家で書家の貫名海屋の手によって書かれている。貫名は書の大家である。川端はその字の見事さに捉えられて、しきりに拓本を欲しがったという。しかし、碑が汚れるので拓本を取ることは厳禁されていた。そこで米田が私蔵の古い拓本を進呈する約束をすると、大喜びしたという。川端にとって、冤罪で自害した石川麻呂のかわいそうな物語なぞどうでもよく、碑の文字だけに興味があつたようだ。米田は、そんな川端が不思議な人物に見えた、といっている。

「石川麻呂の物語にまったく興味を示されませんでした。普通の人は石川麻呂の非業の死に心打たれるのが常でしたから」

という。

川端はこの頃、書に熱中していたようだ。昼食後、山の辺の道へゆく途中に立ち寄った桜井市文化会館の会議室でも、壁に掲げてあつた桜井市在住の書家、梶木掬水の書「野趣」を欲しがった。この書は市の所有物である。川端がいくら欲しがってもどうしようもない。そこで米田が後日、新たに梶木に何か書いてもらって行くと約束して、断念してもらった。

こうした川端について米田は、

「先生はよい書だと思われたら、その所有者が誰かなどといったことには思いが及ばないようでした。美に厳しい目を持っておられた先生なので、当然だと思います。後に梶木さんに「馳」と書いた書をもらって鎌倉のお宅

に届けましたところ、大変喜ばれました」

という。ただ、この時、米田は、

「喜ばれた後、信州から出てきたきれいなお手伝いのお嬢さんと呼ばれて書を見せられた。奥さんと呼ばれるものとはかり思っていたのに、お手伝いさんと呼ばれたので、変だなあと思った」

という。

このお手伝い云々の話は蛇足だが、米田の証言のように川端は「美」に対した時は、関心を美の一点に集中して、他のことどもにはまったく目が届かないようだった。

川端のこうした態度が奇異な言動をするといわれる一因になったと考えられるが、川端にしてみれば、この態度は以前からなんら変化もしていなかったようである。昔から川端はそうだった。それを裏付ける話を次にいくつかあげてみる。

川端にもっとも近しい人物のひとりだった作家の澤野久雄は『川端康成点描』（昭和四十七年十月十五日、実業之日本社）に収めた随筆「李朝」で、次のような話を載せている。この随筆は澤野が川端から李朝の壺をもらった話を主に展開されているが、ある日、川端が澤野の前に李朝の壺を出して、「よかったら、お持ちなさい」といったいう。澤野は驚いて「とんでもない。こんな立派なものを……」と遠慮すると、川端は、今度は別の壺を持ってきて、「これは、どうですか」という。川端は澤野が遠慮しているとは気づかず、差し出した壺を澤野が気に入らないのだと考えたのである。澤野はなおも遠慮するが、川端はついに三つもの壺を澤野の前に並べた。澤野は、

たちまちのうちに三つの壺をならべられた川端さんの物の考え方が、私には貴重なものであった。遠慮など

という世俗の感情は、美しいものに向い合う魂の前では、少しの必要もないものだったのかもしれない。と、書いている。

米田の話と相通じる逸話である。

また、川端は一九四九（昭和二十四）年秋、滋賀県の旧家が所蔵していた浦上玉堂の絵「凍雲篩雪」を手に入れるために朝日新聞社（大阪朝日新聞社学芸部）に借金を申し入れている。額は十万円である。川端の借金申し入れの口上は、近く朝日新聞に連載小説を書くからその原稿料の前借を、である。澤野は当時、自分の給料が「三十代なかばで、月給は多分、千何百円ほどではなかったか」と川端の申し入れた借金額の大きさに驚き、いささか当惑した様子を記している（ただし澤野の書く「月給千何百円」は思い違いのようである。『続値段の明治大正昭和風俗史』Ⅱ週刊朝日編、昭和五十六年十月三十日、朝日新聞社Ⅱによると、昭和二十三年十二月の公務員の初任給は四千八百六十三円、翌二十四年の小学校教員の初任給は三千九百九十一円である。当時、三十代半ばの澤野の月給が千何百円は安すぎる）。

川端の借金申し入れ額は現在の金額にして四、五百万円になるだろうか。いまの経済状況と、戦後間もなくの昭和二十四年とは違うので単純に金額のみで比較はできないが、「その時、朝日の会計の金庫には、十万円という現金がなかった。あるいはあっても、川端さんに貸してしまつては、あとが困る」（澤野久雄「凍雲篩雪」ということもあつて、翌日に用立てて澤野が京都にいる川端に届けたという。こうした川端について澤野は、随筆「美しい日本のひと」のなかで、

（川端は）実に、美しいものに出会えば、その時、金があろうがなかろうが、持つて帰りたくなる。美しい

ものの傍で、暮したい。これはみじめな敗戦が、この作家の内部に彫りつけた悲しみの変形であり、同時にその傷をいやそうとする切実なねがないのである。

と、川端の美に対する固執の要因を、「敗戦が川端に彫り付けた悲しみの変形」と解釈している。

山田寺の「石川麻呂雪冤の碑」の文字に接した川端が拓本を欲しがった態度は、際立って珍しいことではなく、川端にとってはごくありふれた姿だった。川端の書に固執する態度が変だというのは、川端をよく知らない人の言であって、なんらおかしい話ではなかったのである。

山田寺を後にして桜井市役所に到着した川端は、市長室で用意された幕の内弁当の昼食をとり、保田、池田、米田のほか、当時、市の文化的な仕事も手伝っていた奈良県立桜井高校の国語教師、栢木喜一、市職員らの七人で、万葉歌碑設置場所の下見に出かけた。桜井市文化会館へ立ち寄ったのはこの時である。文化会館を出た川端たちはまず、山の辺の道から南にはずれた桜井市忍坂の舒明天皇陵と鏡王女の墓に立ち寄り、それから石位寺へ向かった（石位寺へは栢木が車を運転して、川端、保田を案内し、他の人は後に合流した）。いずれも歌碑建設とは関係のない訪れである。この三ヶ所は近接地にあり、舒明天皇陵と鏡王女の墓は参拝のためだった。主目的は石位寺にあった。また、川端が興味を示したのも石位寺の石仏だった。

石位寺の開基は分らない。現宗派は融通念仏宗である。お堂の中に高さ約一・二メートル、幅約一・五メートルの砂岩に、石仏が刻まれた三尊仏がある。中央の仏は頭上に天蓋をいただいて座り、左右に合掌した脇侍がある。重要文化財（石造浮彫伝葉師三尊像）である。

川端は保田と二人で石仏の前に立ち、石仏を食い入るように見つめた。保田は説明役である。

保田の話によると、川端はしきりに「かわいい、かわいい」と連発した。この時、保田はちょっと意外に思ったという。保田は、

「仏様がかわいく造られているからといって、かわいい、という表現は何か川端さんにそぐわない気がした。確かにかわいい仏様であるのはまちがいないが、余りに川端さんが、かわいいというので違和感を覚えた」
という。

また、

「ほしい、ほしい」

ともいったという。

保田の話では、川端はまるで子供のように感嘆の声をあげ、三尊仏を欲しがった。もちろん、欲しがったところで手に入るものではない。川端は約十分間、石仏を眺め、その場から動かなかった。行こう、といっても、だをこねる子供のように動かなかった、という。

保田は、川端がいつもの川端でないと思ったが、川端の美に対する思いの深さを知っているだけに、川端のそうした態度は保田には、驚くべき事態ではなかった。保田は石仏の前から動こうとはしない川端を待ち、頃合をみはからって「行きましょう」と声をかけた。しかし、川端はなかなか動こうとはしなかった。

当時、川端はおかしいのではないか、という声が文学関係者の間に流れ、奇異の人・川端康成という噂が広まっていたことは、保田も知っていた。だから保田は石仏の前で「かわいい、かわいい」という川端を見て、世間の人たちがいう川端に対する奇異感は、こんなことをいっているのだなと実感した、という。しかし、保田が抱

いた奇異感と世間で噂されていた奇異感には隔たりがあった。文学関係者の間の奇異感にはどこか物見高さがあつた。「それはしゃあない」と保田はいつていたが、川端の言動がおかしいと波紋を広げていたのは間違いない事実でもあつた。

川端の言動がおかしい、という声が増えたのは、川端が東京都知事選で秦野章の選挙応援をした頃からである。川端は作家だから一般人にない心情世界に入つて、一般人が奇妙に思う発言をしても珍しくはないが、川端はみずから「人間改造をした」といい出していた。これも噂に拍車をかける一因となつたのであろう。川端の心境にどんな変化があつたのか分らないが、川端はかつての寡黙から饒舌へ、静止から行動へと身を替えた。川端のこの態度の変化が奇異な言動と捉えられたようだ。

保田が石位寺で川端にちょっとした奇異感を覚えたのは事実だが、保田はそれほど気にとめなかつたという。

もっとも、奇異、と語る保田だって、人によつては奇人だという。奇人は別な言い方をすれば天才でもあるが、保田が川端に覚えた奇異感は、かつての川端なら口にしなかつたような言葉、たとえば国の重要文化財の仏像を欲しがる、つまり絶対不可能な、とても達し得ない欲望をあえて口にする川端の言動にあつた。川端がなぜ、そんな言動をしたのかはすでに澤野の著作を引用して述べた。美に対する川端の姿勢は終始一貫していて、石位寺の石仏を目にした時も変わつていなかったのである。

しかし、川端を奇異とする噂は文学関係者の世界に野火のように広がつていた。その頃、日本文芸家協会の会長だった作家の丹羽文雄も川端の奇異感について発言している。川端が自殺した翌日の新聞談話（一九七二年四月十七日付け毎日新聞朝刊）である。丹羽は次のようにいつてゐる。

（川端と）いつ会ったのか忘れちゃったくらいだから、長いこと会ってないんです。人に伝え聞いたところでは伊藤藤整の三周忌の会のときに、三島由紀夫の父親が「諸君」に書いた文章と、秦野章氏の選挙戦のことを、うらみがましく長々としゃべって出席者たちに川端さん、ちょっとおかしいんじゃないかといわれたというんです。精神的にはタフな人ですが、その二つのことを悩んでいた。そのうえ、入院してなおったはずの睡眠薬の中毒が、またはじまったというので、精神、肉体両面で疲れていた。川端さんとしては、「最近の川端はおかしい」という世間の批評に、せいっぱい、対していたんだけど、フツと負けてしまってガス管をくわえてしまった。そうとしか考えられないですね。

と語っている。

丹羽談話は、川端がおかしいという声のあることと「睡眠薬中毒」を自殺の原因にあげている。丹羽のいう川端の睡眠薬使用はつとに知られた事実で、川端が睡眠薬常用のために入院して、乱用から抜け出たことも周知である。しかし、一度は中止した睡眠薬をいつからまた使用するようになったのかは明らかではない。ただ、奈良を訪れた時は睡眠薬を使っている気配は毛頭なかった。

睡眠薬の使用については精神科医で作家のなだ・いなだが、川端の睡眠薬乱用は「自殺も同然と心配していた」と述べている（前記新聞談話）。睡眠薬の乱用と川端の言動の奇異が自殺に関係があるかどうかは別にして、保田は、奈良での言動と睡眠薬は関係はない、といっていた。保田は、「薬品の影響を受けて言動に奇異が出るような川端さんではない」といった。川端は精神的に強靱で、その精神的強靱さについては多くの人が知っているし、睡眠薬に左右されることなど考えられない、というのが保田の主張である。

実際、奈良散策に訪れた川端は、保田にちょっとした奇異感を抱かせる言動はしたもの、別な場での発言はまっとうだった、という。作家としておかしくなかった、と保田は断言している。川端が口へのぼらせた表面的な言葉をそのまま受け取ると整合性のない支離滅裂な部分があるように思えるが、川端の内部では奇異でもなんでもなく、保田は、川端が口にした言葉だけでおかしいと思っでは間違う、といっていた。

保田は、

「おかしいと思う言葉を川端さんは口にしてはるけれど、その背後にある意味というか、理由を考えたら、なんにもおかしい発言ではないんや」

と、筆者に強調した。

そこで保田から聞いた、「川端さんがかかしい」といわれる要因となつたいくつかの話をこれから記すが、それらは保田と筆者の二人で交わした会話で、なかには電話だったこともある。そのため客観的に立証できる証拠はない。これから書く話の信憑性を問われると反論する根拠がなく、また、沈黙する以外にないが、客観的に立証できないもうひとつの要因に、保田が、川端の死にからむ話をある時期から書かなくなったことがある。真偽は文を読んで判断してほしいが、事実である、とだけ記しておく。

それらの話をする前に、保田が川端のことを書かなくなったいきさつを記しておく。作家・川端の文学とその死を考える時、重要な意味を持つと考えるからである。

保田は川端の死後、自殺の動機をめぐって飛び交う憶測の内容にいらだちを覚えて、川端から撤退した。川端に関する文はもちろん発言も中止した。余程、我慢できない何かが保田にあったと思える。保田は、

「川端さんのことは、もう書かない。知っているいろいろな話は僕が墓場へ持って行く」と、筆者にいった。

保田は自分が川端の話をうっかり書いたり話したりすると、また、尾ひれがついて奇妙な憶測を呼ぶと判断したのである。そういう保田の口調は、いつもの穏やかさとは変わって珍しく厳しかった。世間にただよう噂にむかつて保田は「違う」といいたい面が多々あり、腹立ちがあったようだ。

その例をひとつだけあげておく。たとえば、保田が聞いた憶測のひとつは、臼井吉見著の小説『事故のてんまつ』だった。川端のためにする文だ、と保田はいった。

『事故のてんまつ』は川端の死後、間もなく発刊されベストセラーになった小説で、川端と川端家にきたお手伝いの若い女性との関係が自殺の原因になったかのように書かれている。保田はこの小説の内容について、

「まったく違う」

といていた。

「あんなことええ加減な話や」

と、切り捨てた。

保田は川端の自殺の原因にかかわる重大な何かを知っていたと思えるが、世間の憶測はそれとはかけ離れた内容の話が多かったようだ。保田にとってそれが我慢できなかった。川端が精神的におかしくなって自殺した、という世間の風評も保田にとっては同じだった。保田は的外れだ、といていた。これが保田の川端からの撤退理由である。

保田は川端から撤退する前に、川端のことどもについて筆者に話してくれており、なかには口外してくれるな、といった話もあったが、そのほかのことについては、

「川端さんについて僕が君に話したことは、保田がこういつていた、といった形で書くのはかまへんけど、しゃべった言葉だけを書いてくれ。誤解を生じないように。どう書いても結局は誤解は生じるやろうけれど、それはしゃあないことや」

と、大和弁でいった。

保田が危惧していたのは、川端の奇異と思われ勝ちな言動と自殺の動機が直結することにあつた。むろん保田も晩年の川端の言動に違和感を覚えたことはある。それは保田も認めている。しかし、だから川端はおかしい、精神的に問題がある、それらが自殺の動機に影響している、とは決して考えていなかった。このことを前提に以下の話を記す。

山の辺の道を歩きながら川端が保田に語った話のひとつに、志賀直哉への批評があつた。川端は一九七一（昭和四十六）年の『新潮』十二月号で「志賀直哉」の連載を始めているが、テーマは志賀の人と作品の論評である。最終的な予定連載回数は不明だが、川端の死後発刊された『新潮』昭和四十七年三月号には「志賀直哉（四）」が掲載されている。これが川端の絶筆といわれる。もっとも、川端の絶筆については「岡本かの子全集」の推薦文の書きかけとする説もある。絶筆の問題については川端夫人の秀子は『川端康成とともに』（昭和五十八年四月十日発行、新潮社）で、

主人が亡くなりました時に「岡本かの子全集」の推薦文の書きかけの原稿があつて、それを見た林房雄さん

が、これが遺稿だと宣伝されたものですから、絶筆はこの文章ということになっていますが、それはちがいます。もともと版元の冬樹社が作って来た下書（これも主人が昔書いたものをアレンジしたものです）が気に入らなくて書き直そうとして、相当長い間ほったらかしにしておいたものです。

本当の絶筆は、『新潮』に連載していた「志賀直哉」で、この時も志賀さんの岩波の小型本全集を丹念に読んでいました。

と書いている。ここでは秀子の説よって「志賀直哉」を絶筆として話を進める。

保田によると川端は、

「激烈な志賀さん批判を口にした。暗夜行路も厳しく論評した」

「志賀さんは小説の神様ではない、といった」

「志賀さんに対する批評はぼろかすやった」という。

保田はこうした川端の志賀批判について、

「いくらぼろかすに批判してもかまわん。志賀さんも川端さんも作家やから、作品を批判し合うのは当然や」といった。

ただ、保田は、

「川端さんにしては珍しく激烈な口調やった。いつもの川端さんにはない激しさやった」と、言葉を重ねた。

もしこの時の川端の言動に奇異感を見出すとするなら、その舌鋒の激しさだ、と保田はいう。むろん保田は激しい舌鋒だから、川端がおかしいとはいわない。文学者として当然、といっていた。

保田は川端の志賀批判をただ聞いていた。批判の内容が的を得ているとも、外れているともいわなかった。むろん保田には保田の志賀に対する考えはある。

「それを話して志賀論をするというような場ではなかった。川端さんの志賀さんに対する意見を聞いていただけたら」

と、保田はいった。

川端がなぜ志賀を激しく批判したのか。作品のどこかに決定的な欠陥を見つけたのか。批判する理由を川端は、保田に詳しく説明しようだが、

「細かい点は忘れてしまおうた」

と、保田は批判の理由を語らなかった。

また、小説の神様、と世間で形容された志賀について川端は以前から、

「志賀直哉は小説の神様ではない。小説の神様というなら徳田秋声だ」

といっている。唐突な批判ではない。

志賀を「小説の神様」とするかどうかは人によって異なる。評価は人によってそれぞれ違うから川端が志賀を厳しく批判しても、保田のいうようになんら差し支えはない。しかし、なぜこの時期に川端が志賀を取り上げ批判したのか。むろん理由はある。志賀が前年（昭和四十六年）十月二十一日に亡くなっていたからである。川端が

奈良を訪れた三ヶ月前である。志賀の死によって、川端は志賀についての文章を出版社から依頼され、雑誌に連載することになった。それが志賀論を書き起こすきっかけである。ほかに志賀論をする動機は見当たらない。

「志賀直哉」の第一回は『新潮』昭和四十六年十二月号の志賀直哉追悼号に掲載された。

「川端さんは、志賀さんの小説や随筆を全部読み返して、志賀さんを小説の神様というなどとは、とんでもない、と再認識されたようや」

と、保田はいつていた。

川端の志賀批判については秀子も書いている。先述の『川端康成とともに』の中で秀子は、川端の、

志賀さんに対する敬愛の気持は終生かわりませんでした。世上、主人が亡くなる前に志賀さんの悪口を言ったという噂が流れ、それで川端も頭がおかしくなったという話になったようですが、これなどもそれこそおかしいことです。志賀さんについて批判していたことがあるとすれば、それはただひとつ、賞とか会員選挙の時に、身崩しすぎて公正を欠くきらいがある、ということでした。しかし、これは公人としての建前であったと言ったほうがいいでしょう。主人はどんな場合でも公正、公平であらうとしました。

と書いている。

川端の志賀批判は晩年に始まったことではない。それ以前から行われている。たとえば作品評の「弾の『無法人』と直哉の『万暦赤絵』」（『朝日新聞』昭和八年八月三十日）の終わり部分で川端は、

私も一昔前志賀氏を「小説の神様」として耽読した一人であるが近頃読み返そうとすると、その神経の「我」がむかむかとして堪えられなかった。

と、「小説の神様・志賀」を暗に否定している。志賀を正面切って批判し、なんの遠慮もない。作品批評だから当然である。

保田が聞いた川端の批判内容は志賀作品についてだったことはすでに述べた。いわゆる人に対する悪口ではない。しかし、川端の志賀あるいは志賀作品批判が、世間には悪口だと誤解されたのかもしれない。

志賀の死を動機に川端が筆を起こした「志賀直哉」論は結局、完成しなかった。川端の死によって断ち切られたのである。

三

川端が自殺したのは、一九七二（昭和四十七）年四月十六日である。新聞報道によると、場所は神奈川県逗子市小坪五の逗子マリーナ・クラブハウスの四一七号室だった。この年、一月七日に購入したマンションである。主治医と警察医の検視では、死因はガスによる中毒死で、死亡推定時刻は同日午後六時頃。苦しんだ様子はなく、睡眠薬など飲んでいなかった。遺書はなかった。七十二歳だった。

川端はこの日、午後三時頃、ポロシャツ、ズボン姿でマンションにやってきて、部屋にこもっていた。午後九時頃、付近の部屋の人から、ガス臭い、と、警備員に連絡があり周辺を調べたが、どの部屋か特定できなかった。同十時頃、川端家のお手伝いさんから「川端がきていないか」と連絡があり、部屋へ行ったところ、ガスの臭いがしたので室内に入ると、浴室内の洗面所で、川端がガスを口にくわえて、薄い布団をかぶって死んでいた。

川端は鎌倉の自宅（鎌倉市長谷二六四）を午後二時頃、「散歩にゆく」といつて出ていたという。

川端の自殺の原因については、際立った動機がみつからないこと、さらに遺書が残されていなかったことなどから、先にも述べたように、さまざまな憶測が乱れ飛んだ。睡眠薬の乱用による発作的な自殺とする意見も出たが、検視の結果は睡眠薬を飲んでいなかった、である。これには飲んでいた、という見方もあるが、こうした動機探索の中で自殺と直結して語られたひとつが、川端の言動の奇異感、つまり、川端は精神的に尋常ではなかったのではないか、という説で、丹羽文雄の談話はそのひとつの典型である。

事の真偽は分らない。言動の奇異感を睡眠薬の影響のせいだ、とする人もあるが、関係は不明である。

筆者は先に、川端は精神的に強靱だ、と書いたが、それは川端が睡眠薬の影響をまったく受けない精神力を持っていた、という意味ではない。睡眠薬の影響を受けた小説を川端が書いていることは川端自身が認めている。朝日新聞に一九六一（昭和三十六）年から翌六二（三十七）年にかけて連載した小説「古都」に影響が出ている。この小説の執筆中、川端は睡眠薬を常用しており、頭が朦朧としていたことから、わけの分からない部分があつて、単行本化に際して手を入れている。川端みずから文がおかしい、と気づいて手を入れた。精神的に強靱だ、というのは、一度発表した小説の不備に徹底的に手を入れるこの姿勢を指す。こうした作業は作家にとって苦痛に近い労働だからである。精神が強靱でないとできない。

要は川端の自殺と睡眠薬がまったく関係ないといっているのではなく、睡眠薬との関わりを詮索しても意味がない、ということである。関係があるともないとも、現実の問題として結論は出せない。

保田の話をつづける。

石位寺から川端たちは車で北上し、桜井市と天理市境近くの巻向川（穴師川）へ行った。志賀批判が行われたのは、この川べりを歩いて、万葉歌碑にする石を物色している時だった。巻向川（穴師川）で川端の氣に入った河石を選んで、それに万葉歌を刻んで建てるのである。

川べりを歩きながら川端は志賀批判をしながら、一方で、河原に転がっているさまざまな石を物色した。保田と川端が並んで歩き、他の人たちは少し離れて歩いた。雑談をしながら歩く二人の後姿を見ながら米田たちはつき従った。二人の話は米田たちには聞こえなかった。だから志賀批判を保田に川端が語っているのを米田たちは知らない。

この道行で川端は、河石についての良し悪しや自分の石の好みについても口にした。保田によると、川端は、「石は常に濡れているのがいい。乾いた石はだめだ。それに黒っぽい、しっとりとしたのがよい」といったという。

巻向川（穴師川）には自然石がごろごろと河原にある。川の幅は四、五メートルである。普段は小川で深さは二、三十センチばかりである。川端たちが訪れた日は水が少なく、河石の物色には丁度よかった。川端と保田は河原の石を見やりながら文学論やそのほかの雑談にふけた。志賀批判はその中のひとつの話題で、やがて話は石のことに移った。本来の目的の石探しに還ったといっている。

そんな中でふと川端が足を止めて、ある一つの石を指さしていった。

「あの石は僕の墓石にいいなあ」と。

保田は、

「えっ」

と、驚いて川端の顔を見た。その表情はごく平穩だった。

保田は、黙って川端の指さした石を見た。直径五十センチほどのやや緑がかった石である。川水が石の頂部をわずかに洗っている。石が緑がかって見えたのは水で濡れているためだった。

保田は、

「縁起でもない」

といったが、言葉をつがなかった。川端も黙って石を眺めている。

「深い意味があつて川端さんがそういったのではないと思う。このことと、川端さんの自殺を直結して考えたらあかん」

と、保田は筆者に念を押した。

川端が自らの墓石に触れる発言をしたのはこれだけではない。この年、二月十日、米田が川端の自宅を訪れた時も口になっている。米田は川端と雑談をしていたのだが、その席で川端が笑いながら自宅の上がり口に置いてある幅約五十センチ、長さ約一・五メートルの長方形の黒御影石を指さして、

「世間では墓石に黒御影石はよくないというね。しかし、僕の好きな石は玄関のあの沓脱ぎ石なので、もし死んだらあの石を墓にしたい」

といった。

米田はちよつとびつくりしたが、話をそばで聞いていた秀子が、

「いくら形のよい石でも永い間、沓脱ぎに使っていた石です。縁起でもないことをいわないでください」

とたしなめたという。これと同じ内容の話は秀子の『川端康成とともに』にも記されている。墓石の話は、別の時にも出ていたかもしれない。

保田が、墓石の話と川端の自殺を直結して考えてはいけないというのは、普段から川端は、みずからの墓石の話を口にしてるので、つい口にしたにすぎないという意味である。もし巻向川（穴師川）の散策から三ヵ月後に川端が自殺していなかったなら、この墓石の話はごくありふれた話になる。直後に自殺しているから川端の胸中に自殺の覚悟があったように他人には聞こえる。そうした邪推を保田はたしなめた。まして川端はこの時、七十二歳である。みずからの死を口にしてもおかしくない年齢である。墓石に興味を抱いても普通である。生前から自分の墓石を建てて用意する人もあるほどだからなら奇妙ではない。

筆者は、保田が、川端の墓石うんぬんの話に驚いたと記したが、それは巻向川（穴師川）で万葉歌碑にする石探しが道行の目的なのに、川端があらぬ墓石の話を口にしたからである。歌碑の石探しはのんびりとするわけにはいかなかった。計画は煮詰まっいて、この日中にどうしても川端は石を探さなければならなかった。ところが川端はそんな差し迫った事態を失念しているかのように墓石の話を口にした。保田にしては、ちよつとあつけにとられた思いだったのである。しかし、保田の心配はすぐに消えた。川端の墓石談義はそれだけで終わつた。

川端の歌碑用の石は、扁平な、大人がひと抱えできそうな自然石を選んで決着した。やや青味がかって見える石である。ありふれたなんの変哲もない石であつた。

川端と保田はこの後、井寺池に向かった。井寺池の堤が川端の選んだ歌碑建立の地（この場所については、奈良へ用事でおもむいた井上靖に、場所の下見をしてほしい、と川端が依頼し、井上が選んで置いた地ともいう）である。背後に三輪山の全景が見え、麓には松原神社がある。四季を通して山の辺の道に沿ったもともとも優れた景勝地のひとつだった。また、三輪山は三島由紀夫の『豊饒の海』に登場する山として知られる。山全体が神だという神体山で、いわゆる甘南備山である。南西麓には大三輪神社がある。

川端が行った井寺池は農業用水池で、松原神社のすぐ近くから東西約二百五十メートル、南北約百メートルの長方形をしている。中ほどに池を二つに割る形で幅三メートルほどの堤があり、見た目には二つの池に見える。東側の池がやや高く西側が低い。堤の下を水路を引いて結び、東側の池の水を西側の池に落とす仕組みになっている。棚田のような池である。

川端が歌碑の建立場所を選んだのは、この二つの池を区切る堤を南から北へ三十メートルほど入った西側の池の堤の東側部分である。そこから真正面に二上山が見える。目を落とすとすぐ下に女王卑弥呼の墓説のある箸墓古墳がはたて貝型の美しい姿を見せている。最初に記した川端が茫然と夕日に見とれていた場所はここである。川端は初めて訪れた場所だったが、気に入ったようだった。歌碑の建立地として異論はなかった。場所は決まった。後は川端が筆で万葉歌を書いて、それを石面に写して彫るだけだった。

川端が歌碑用を選んだ歌は、

大和は国のまほろばたたなづく青垣山ごもれる大和し美し
である。

保田によると、川端の選んだこの歌をめぐるちょっとした問題が起こった。万葉歌でなかったからである。桜井市が計画していたのは万葉歌碑の建立だった。

「倭は国のまほろば」の歌は『古事記』と『日本書紀』に登場する歌謡である。『古事記』には中巻の「倭健命の薨去」に出てくる。倭健命が三重県の能煩野に行った時、国をしのんで歌ったと記述されている。岩波書店刊の日本古典文学全集『古事記祝詞』によると、

倭は 國のまほろば たたなづく 青垣
山隠れる 倭しうるはし
とある。

また、同じ全集の『日本書紀』では上巻の景行天皇十七年の条に登場する。景行天皇が野中の大石に登って都をしのんで歌う三首の歌謡の中の一首で、二首目に出てくる。

倭は 國のまほらま 疊づく 青垣 山
籠れる 倭し麗し
である。

『古事記』では倭健命の歌であり、『日本書紀』では景行天皇の歌である。

『古事記』と『日本書紀』のどちらが元々の歌なのか判定は難しいが、倭健命の歌とする説が一般的で、川端は倭健命の歌として選んでいる。歌に細部の相違、たとえば、二節目は記が「まほろば」、紀は「まほらま」とあるが、歌意に変わりはない。本来は国見の歌謡と考えられ、岩波版『日本書紀』の頭注は、「大和はすぐれた国。青

青とした山が重なって、垣のように包んでいる大和の国は立派で美しい」と訳している。

いまは『古事記』が記す倭健命の歌として話を進めるが、川端が選んだこの倭健命の歌をどうするかで、保田は頭を痛めた。

保田は、

「川端さんが、倭は国のまほろば、を選ばれたので、それは万葉歌と違う。万葉歌を選んでもらえませんか、とお願ひしたけれど、川端さんは、この歌でないとだめだ、といわはるのや。桜井市の計画は万葉歌碑を山の辺の道沿いに建てることやったから、ほかの人はすべて万葉歌を選ばれている。川端さんひとりが違う歌を選ばれては困るわけや。市が困るから、と何度もいったけれど、川端さんはがんとして聞き入れられなかった」

という。

川端が倭健命のこの歌を選んだ理由ははっきりしない。大和を詠んだ歌としても有名な歌であるのは確かだが、それにしても川端がなぜ選歌の理由を明らかにしなかったのかは分からない。

川端が万葉歌を選ばなかったことから、桜井市の計画は急遽「記紀万葉歌碑建立」に変えざるをえなくなった。もともと記紀万葉集はいずれも八世紀の奈良時代にできた本で、記紀には万葉集に劣らぬ優れた歌謡が数多く記載されている。万葉歌だけに絞り込んで歌を選ぶよりも記紀を入れた方が歌の範囲に変化がでる。桜井市も万葉歌にこだわらなかつた。ただ、ほかの選者に、万葉歌を、といっていただけに、記紀もかまわないと連絡し直す手間だけが残分だった。

桜井市が計画した歌碑建立は川端のおかげで選歌の範囲が広くなり、現在設置されている計六十基の歌碑のうち

ち小林秀雄の「山邊道」と井上靖の「磐余道」という道標の書を除いて、『万葉集』以外に『古事記』『日本書紀』から五点と、福田恒存が『懷風藻』から、佐藤春夫が自作の俳句を選んでゐる（佐藤の句は後に記紀万葉歌碑所在図から除かれた）。記紀万葉歌碑とはいふものの選者の自由に任される格好に落ち着いたのである。

歌碑建立計画で川端に残った仕事は、「大和は国のまほろば」という倭健命の歌を墨書して、石に刻む文字の下書きを作ることだった。が、川端はどうしたことかなかなか筆を執らなかった。そのあたりのいきさつを米田はその著『桜井ふるさと散歩』の「川端康成先生のこと」で次のように記している。

（川端に）最後にお逢いしたのは、三月九日だったと思います。あの時は、余程、疲労憔悴しておられたようです。川端邸の応接室です。

「米田さんが思っている程、この川端は、えらい人間じゃありませんよ。まほろばの御歌は、歌も最高だし作者もすばらしいお方です。こんな立派な御歌を書くのに、この川端がふさわしい人間かどうか、私は今、これに困っているんです。字を書くのは今直ぐにでも書けます。あなたと前からお約束の、『梁塵秘抄』のへ仏は常にいませども」の歌なら書いて差し上げます」

といったという。

川端は倭健命の歌の選者として自分がふさしいかどうか悩んでいるという。分かるような分からない理由である。保田は、

「我々には分からん理由があったのやろ」

と筆者に語ったが、書けない歌をなぜ選んだのだろうか。

書は結局、書かれずに終わった。川端の自殺で果たされなかった。現在、井寺池堤に建つ碑に刻まれている文字は、川端がノーベル文学賞授賞式で講演した『美しい日本の私―その序説』の原稿の文字を写したものである。

また、川端の死後、川端が好んだ万葉歌として、額田王の、

三輪山をしかも隠すか雲だにもこころあらなむ隠さふべしや

の歌の碑が、桜井市芝に設置されている。三輪山を見上げる位置である。川端は万葉歌に好みの歌があったのに、倭健命の歌を選んでいたのである。

川端の選歌のいきさつについて米田は、「大和は国のまほろば、という歌が、大和を歌ったもつともよい歌です。先生これを書いてください、と、自分が依頼した」と、筆者に語ったことがあるが、真偽は不明である。

五

井寺池の堤で川端たちは歌碑の具体的な建立場所について話し合った。保田によると川端は当初、

「池の水面と歌碑の頭が直線になる土手の水際に建てて」

といったという。堤の道から傾斜の急な土手を数メートル下がった位置である。この提案に保田は、
「そんな所に建てたら歌碑が道から見えないですよ」

といったが、川端は、

「風が吹いて水が波立って歌碑の表面を濡らすのがよいのです」

と譲らなかつた。保田は、

「子供が歌碑を見るために土手を降り、もし池に落ちたら問題になる」と反論した。すると川端は意外な返答をした。

「落ちたら泳げばいい」

保田は驚いた。が、川端は普段と変わらない表情をしていた。

「泳げない子供もたくさんいますよ」

と、保田はさらに説得をしようとしたが、川端は動じる風もなく、

「泳げないなら泳ぎを教えればいい」

といい放った。

保田は絶句した。「そんな無茶な」といいたかつたが、黙つたという。

後に保田はこの川端の言動について筆者にこう説明した。

「川端さんのこの言動だけを捉えて考えたら、川端さんは奇妙なことをいうなあと思うやろ。僕もその場ではそう思うたけれど、川端さんは大阪の旧制茨木中学の出身や。茨木中学は水泳で有名な学校やつたんや。まだそのらの中学にプールのない時代に、プールをこしらえて学生に水泳を教えている。水泳の全国大会でも優秀な成績を残している学校やつたんや。プールは中学生が自分たちで掘ってこしらえたんやが、川端さんもプール掘りをしたひとりやつた。それが頭にあって、川端さんは落ちたら泳いだらええ、泳げん者には水泳を教えたらええといわはつたようや。僕たちが川端さんおかしいこというなあと思うても、川端さんの頭の中では別におかしいこ

とでもなんともなかったわけや」

と。

保田の、川端がプール造りをしたという話は事実である。茨木市立川端康成文学館発行の『川端康成その人とふるさと―挿話編』（平成元年三月三十一日発行）に、茨木中学のプール造りの話が載っている。川端の中学時代の同級生や生徒たちに訪問インタビューしてまとめたものである。そのいくつかは次のような内容である。

体操の杉本伝先生は、一年から、水泳をやらさりました。

新運動場の一番南の端の溝池みたいなのを改修して、そこで泳ぎました。

一年では、“観海流”といって、かいで泳ぐ練習、二年では“水府流”という横泳ぎを教えてくださいました。

三年の時に御大典記念で、二十五メートルのプール掘りです。

四年と五年は、軍事教練もやらんならんで、三年生が主になって掘りました。

体操の時間も作業ばかりです。しんどいおますわ。（笑）

スコップで掘って、モッコへ砂を入れて茨木川の堤防へはかしに行きます。

掘削、土運びは、皆体操の時間にやらされました。

（川端の二年後輩の河合孝勝）

私が五年生の時でしたわ。体操の時間をやめてしまつて、プール掘りに専念です。

生徒が土掘って、モッコで土を運んだり、そういう重労働を盛んにやらされたものです。

その時にできた最初のプールは、コンクリートも何もないので、周囲にカセ打って、コワ板で囲んで下は土砂です。

泳ぐと、泥が動いて水が濁ってしまいます。

これではかなわんと、大正天皇の即位式の記念として第二次の工事をやりました。

この時は、セメントを使用しましたから、かなり理想的なプールができたんですね。

（川端と同級生の田村正雄）

このほか川端の同級生の陰山恵昌、小林清隆も同様の発言をしている。プールの深さは「五尺でした」（小林）という。

これらの話の要点を整理すると、茨木中学では水泳教育に熱心な体操教師の杉本伝が、生徒にさまざまな泳法を教えたようだ。その頃、まだ一般に知られていなかったクロールも教えている。プールは当時の加藤逢吉校長が「水泳は健康にいいから生徒を泳がしてやれ、という発想で、プール建設を思いつかれたわけです」（田村）という。日本で最初の学校プールだった。この水泳指導のおかげで「茨木の水泳が天下に知れ渡って、一時は水泳王国・茨木でした」（同）という状態になる。

プール造りが行われたのは大正初期の話で、茨木中学の後身の茨木高校の『茨木高校百年史』（大阪府立茨木高等学校校史編纂委員会編、平成七年十一月七日発行）によると、「大正二年（一九一三）六月二十日に、運動場の南側に、生徒の作業によって約二〇〇坪の水泳池が造られた」。この水泳池は水溜りだった池を浚渫したもので、「南北約

三〇メートル、東西約一八メートル、水深約一メートル四〇」で、「周囲に木の丸太を打ち込み、板を張って土囲いとし、茨木川から砂利を採って底部に敷き詰め」た。しかし、生徒が泳ぐと泥が巻き上がるので、大正天皇の御大典記念として、大正四年九月六日から、再び、生徒の手によって整備作業が行われたという。

川端が茨木中学に通っていたのは、まさにこの時期に当たる。当時、川端は体格が虚弱だったといい、「（プール掘りも）あまりしませんでした」（川端の同級生で親友だった正野勇次郎）という。生徒に課せられたプール掘りを熱心にやらなかったという発言だが、教諭の杉本伝は、「四年生だった川端康成君（作家）も、弱い体をおして、一時限十三往復の土運びをやっていましたよ」と語っている（前記百年史）。

川端が「落ちたら泳げばいい」といった背景には、保田のいうように川端が中学生だった時の水泳場作りと水泳訓練が頭にあったのは間違いない。川端はいきさつを端折って保田に「泳げないなら泳ぎを教えればいい」といったのだろう。

井寺池堤の川端の歌碑建立位置をめぐることは、しばらく押し問答のような状態が続いた。しかし、最終的には川端が折れて、井寺池堤の道際に建てることになった。平坦な堤道と急傾斜になるのり面の境目辺りである。傾斜面の最上部とっていい。そのため歌碑はちょっと歪んだ形で建てられた。そのいきさつについて米田は「川端康成先生のこと」で、

「遠くからみて、池の堤の線が截れないように碑は低く据えて下さいよ」と川端先生。

「子供がのぼったり、腰かけたりしませんでしたか」と私（米田）。

「それでも良いじゃありませんか」と先生。

「先生、何か碑のそばに木でも植えて」と私。

「いや、何も無い方が良いでしょう。この堤は秋になると、芒が一杯生えるんでしょう。芒の銀色の穂波の中に、碑がうずくまっているなんて、良いじゃありませんか」と先生。

と書いている。

保田の話では、池面と同じ高さの所に建てたいという川端を説得した後、川端は「それじゃ堤の中間ほどに」といったという。しかし、保田が、

「中間に建てても子供が落ちる危険性は同じですよ」

といって、堤道とのり面の境目になったという。この境目の位置についても保田は、

「それでも道を歩いている人からは見えにくい。堤道から身を乗り出して覗き込まなければ見えないですよ。道のすぐ横にしてはどうですか」

といったという。

しかし、川端は応じなかった。保田は川端にここまで譲ってもらったのだから、これ以上、押すのは失礼だ、と考えて、のり面に建てることに賛同したという。

米田が川端の言葉として書いている「堤の線が截れないように」というのは、のり面に建てることになった直後の話である。桜井市側の代表である米田にとっては、保田の考えと同じようにのり面では危険性が残る。なんとか堤道に建てたかったようだ。米田が「子供がのぼったり、腰かけたりしませんか」と川端にいつているのは、堤道に建てたい思いがあったからである。歌碑に子供が腰かけるなんて、という一般常識の禁忌を持ち出して川

端を翻意させようと試みたのである。川端にしてみれば、できるだけ池面近くに建てたいのに桜井市の要望は道沿いである。その要望にそって最大限に譲ったのがのり面だった。保田は、

「川端さんの美意識を傷つける気の毒なお願いをしたもんや」

といていた。

さらに米田が「先生、何か碑のそばに木でも植えて」といっているのは、道面に碑の頂部を合わせて建てる石碑が分りにくくなる。川端の歌碑と分るように印の木をというわけである。

というのは、川端たちが井寺池を訪れた一月は、周辺の草が枯れて閑散として見晴らせるが、春から秋にかけては一带に草が生い茂る。高さが約五十センチていどの歌碑では草がなくとも見えにくいのに、道面に石の頂部を合わせて建てる、草が生い茂ると完全に隠れてしまう。山の辺の道を訪れる人がもっとも多い春や秋のシーズンに、川端の歌碑は草の中に埋没する。歌碑に気づく人は少なくなるだろう。そのうえ井寺池堤は山の辺の道からやや外れている。見落とす人が多くなるのは必定だった。そこで米田は歌碑の目印に木を考えたのである。しかし、川端に拒絶された。最終的には歌碑の周囲から草を除いて土の部分を広げる方策がとられ、現在の姿に落ち着くのである。

六

紆余曲折はあったが、歌碑の建立場所も決まり井寺池を後にした川端は、保田によると、「穴師川を少し遡つ

て、河石を選ばれた」（彌生の三日月）という。この記述について米田は、「歌碑用の石を探してから井寺池へ行った」という。米田は、「井寺池の後に行ったと保田先生が書かれているのは、先生のちょっとした錯覚です」といつていた。しかし、保田は筆者に「井寺池の後、穴師川に寄った。薄暗がりて河石がよう見えへんかったので、すぐ車に乗った」といった。

川端が巻向川（穴師川）へ行ったのは井寺池にゆく前だったのか、後だったのか。米田は、「川端康成先生のこと」で、

亡くなられる年の一月二十一日に先生と御一緒に、巻向川の川べりを歩いて、歌碑用の石を物色したのです。それから、池の堤の歌碑予定地点で、枯れ草に腰を下ろして、暮色の近づいた大和国原を眺めていたのです。と書いて、前、と断定している。

これに対して保田は「彌生の三日月」で、

三輪の松原神社へゆき、先生の歌の碑を建てる池畔の場所を自身で定められた。選ばれた歌は、日本武尊の国毘の御歌、「倭し美し」を書くと申された。そのあと穴師川を少し遡つて、河石を選ばれた。

と、後だ、という。

米田と保田の話は逆転している。どちらが本当なのか。前でも後でもどちらでもないかという声が出る。そうだが、保田の文をよく見ると、「歌碑用の石を物色するため穴師川へ行った」とは書いていない。「そのあと穴師川を少し遡つて、河石を選ばれた」とある。

保田のこの記述を実際の地形にあてはめてみると、おかしいことが起こる。

井寺池は三輪山の北東の麓、松原神社の前にあることはすでに記した。井寺池へゆくには、三輪山沿いの山の辺の道を南から歩くか、それとも北からゆくか、または西から傾斜の急な細道を登るしかない。川端たちは車で三輪山北東端の穴師の集落から山の辺の道に入っている。井寺池にゆく三つの道のうち北の道である。三輪山に向かつてアスファルト舗装された道を東進してきて、それから、三輪山の北端で右折して山の辺の道に入るコースである。南にほぼ直角に折れる。巻向川（穴師川）はアスファルト道沿いに東から西へ流れているので、川端たちはそこで川と別れたことになる。

保田の書くように井寺池の後、巻向川（穴師川）を遡ったとすると、川端たちは元の右折地点に戻って、そこから帰るべき道とは正反対の三輪山裏へ向かったことになる。米田のいうように保田は錯覚を起こしたのだろうか。しかし、保田は桜井市で生まれ育っている。井寺池周辺は子供時代の遊び場所であった。付近の地理を保田は熟知しており、間違ふことなど考えられない。では、なぜ保田は、「そのあと穴師川を少し遡って、河石を選ばれた」と書いたのか。

この河石探しは歌碑用の石ではなかった。先に巻向川（穴師川）で川端が、自分の墓石によい石だ、といったという話を記したが、川端は井寺池の後、再び、保田に墓石を探したい、といったのである。保田はそのことを隠した。「彌生の三日月」の文の背後に押し込んだ。そのため、米田との行き違いが起こったのである。保田が隠した理由は分らないが、筆者に、

「穴師川（巻向川）の河石が気に入ったようで、もう一度、探したい、とおっしゃった」と話した。

しかし、保田は墓石を探したいと川端がいったとはいわなかった。筆者の何の石ですかという問いにも答えなかった。

「川端さんは穴師川の濃い緑色をした石が気に入られたようや」といった。

「その石は泥岩のような柔らかい石ですか。それとも花崗岩のような堅い石ですか」と聞くと、

「石の種類は分らんけど、濃い緑色の石や」

と、保田はいった。

また、保田は、

「生駒石も欲しがられていた」

と、話の矛先を振った。河石の話をしたくないといった語調だった。

生駒石は奈良県西部の生駒山で採れる石である。生駒山西北麓の大阪の石切は石の産地でもある。川端がその石を欲しがったという。米田にもこの話はしている。生駒石を買って鎌倉に運んで欲しいということでした、と筆者は米田から聞いた。その時、川端は石の寸法を指定したが、鎌倉の家の庭には入らない大ききだった。米田が庭に入らないですよという、庭の入口（木戸）を壊す必要がありますね、と川端が答えた、と米田は回想している。

保田が、井寺池を後にした川端が、再び穴師川（巻向川）で墓石探しをしたい思っていた、と筆者にいわなかつ

たのは、いらぬことをいって、また誤解が生じては困ると判断したからである。「彌生の三日月」に書いたこと以外の話は一切、口にしないと保田はいった。

川端が、河石を探したことについての米田と保田の記憶はいずれも事実なのである。

この後、川端たちは桜井市の車に乗って、市職員の運転で奈良市の奈良ホテルに向かった。川端はホテルに立ち寄った後、車に戻って京都へ向かった。

川端は、「途中では、国の政治のこと、国際情勢のこと、海外との文化交流のこと、また今日の若い作家のこともし話された」（「彌生の三日月」）という。この時、「国籍不明というやうな激しい言葉が、先生の口から出た」「何某のことを、ただ一言、しづかに仰言つたのである」と保田は記している。ある作家の作品について「国籍不明」という言葉で川端が表現したのである。保田は「何某」が誰なのか口にはしなかった。分る人には分るということである。

京都へ向かう車は慎重な運転で走った。道は国道二十四号線である。保田は、「制限速度を守って、スピード違反はまったくなかった。川端さんに乗せているのやから、市職員も慎重にならざるを得なかったのや」

と、道中の様子を語った。

この話は川端が自殺した夜、保田から筆者が聞いた。話しながら保田はちょっと面白そうな表情をした。市職員の緊張振りに笑みが浮かんだようだ。

川端が自殺した日、保田は自宅で佐藤春夫を偲ぶ「春日忌」を営んでいた。毎年の恒例で、沢山の人が集って

いた。それらの人たちが帰った夜、川端の自殺の報がもたらされた。筆者が保田の自宅を訪れたのは、それから間もなくである。妻の典子は里に戻っていて留守だった。保田は気を鎮めるために風呂に入っていた。待っているとしばらくして出てきた。部屋にいたのは筆者と通信社の記者と保田の三人である。ほかの部屋に女性が一人いてひんばんにかかる電話の応対をしていた。居間と思える部屋にいたようだ。電話は報道関係者からのもので、談話取材の申し入れのようだった。一時、保田は席を立てて電話に出てなにやら話をしてから戻ってきた。

保田の自宅はすでに記したように身余堂と名づけられている。すぐ隣は田邑陵（御陵）で身余堂との境目には赤松林がある。その向こう目を挙げたあたりには小倉山が見える。小倉山には三日の月がかかっていた。十時ごろだったと記憶する。保田の川端の思い出を書いた「彌生の三月月」は、当夜のこの情景からつけられた題名である。

保田は間断なく煙草に火をつけた。「朝日」という煙草だった。「口つき煙草」と呼ばれるもので、吸い口が白紙を丸くして作られている。人によっては吸い口の紙の部分を押しつぶしてぺちゃんこにして吸う。いま多い煙草のフィルター部分の中身を抜き、外側の紙部分だけを残したような煙草と思えばよい。明治三十七年に発売開始され、昭和五十二年三月の「会社在庫売り尽くし」で品物がなくなった段階で発売が停止された。保田はこの煙草しか吸わなかった。火をつけて短くなれば、すぐに次の煙草に火をつけた。坐した机上には二箱の「朝日」が置いてあった。

「市職員の車の運転ぶりが余程、川端さんに感銘を与えたのやろう。川端さんは職員や米田にフランス料理をご馳走してやる、といいださばったのや」

と、保田は部屋から見える小倉山の方に目をやりながらいった。目の前にいる二人の男に語るといふ風ではなかった。思い出のあとをたどっているまなざしだった。

米田は「川端康成先生のこと」でこの時、フランス料理店が見つからなかったので、行き先を変えて行った日本料理店での川端の様子を次のように記している。

運転していた私の部下の若い職員に、「あなたの今日の運転は大変、正確安全だったし、半日、命を預けたんだから、今夜は、あなたが正客です」と、恐縮するのを無理矢理床柱を背に座らせたりして、上機嫌でした。奈良から京都に到着した川端は、何度か行ったことのあるフランス料理店を探し当てられず日本料理店に落ち着いたのである。

「川端さんはフランス料理店の名前も覚えておられなかった」

と、保田はちよつとおかしそうにいった。米田は、

先生は車を降りてトコトコと交番へ入って道を尋ねたりされました。交番の若い警官は、最初、何気なく応対していましたが、そのうち先生の御顔に気付いて驚いて直立不動の姿勢をとったりしていましたが、結局、探しあてられず、それではと祇園の料理屋へ連れて行って貰いました。

と、書いている。

川端が警官に店を尋ねたのは四条大橋西詰の交番である。

「そやけど、店の名前が分らんもんやから、巡査は顔に汗かいて調べていたけれど、探し当てるのは無理やわなあ」

と、保田は相変わらず小倉山の方に目をやっただまま話した。

川端は車の中で町のあちこちに目をやりながら、

「あの道のところだった」

「いいや向こうだったかなあ」

と、指差しながらうろ覚えの道筋をいい、いわれるままに市職員は車を走らせた。

川端がフランス料理店を懸命に探したのは、

「運転しているのが若者の職員やったから、若い人には西洋料理がええやろ、という考えからやった」

と、保田はいう。

川端が探したフランス料理店は、四条河原町から四条通を少し西へ歩いた北側の萬葉軒だった。しかし店は見つからず、祇園の日本料理屋に変更して、川端たちは座敷に通った。部屋に入った川端は、米田の記述にあるように、恐縮する市職員を無理矢理上座にすわらせた。はじめ市職員は固辞したが、川端も譲らない。その様子に保田が、

「川端先生がそうおっしゃっているのやから、今日は先生のおっしゃるように上座に」

といて決着がついたという。

保田は、

「川端さんが恐縮する市職員にむかって、今日は君が主賓だから、といわれるのを聞いていて、当初は、川端さんちよっとおかしいなあと思うたけど、普通に考えてみたら、その日、一番しんどい目をしたのは市職員や。な

にしろノーベル賞作家を車に乗せて事故でも起こしたら大変なことになる。市職員も気を使いどおしで、神経がくたくたになっていたやろ。そやから川端さんが今日一日、あなたに命を預けていて無事だったのだから、そのお礼ですよ、とおっしゃたのも別段、おかしくないわけや。普段から川端さんは、人に細かな神経を使われる人やったし、おかしい、と思う方がおかしいわけや」

といった。

保田は、親交の深かった川端を失ったのに、哀しみの様子を見せなかった。風呂に入ってすべての気を鎮めてきたようだった。淡々とした表情でいる。小倉山にかかる三日の月に目を上げる時だけ、顔に一瞬、悲哀感が漂った。

間を置いて、

「川端さんは死を突き抜けていはったなあ」

と、保田は凝視した三日の月から目を離さずに、詠嘆をこめたように突然、ぼつりといった。筆者と通信社の記者は同時に、

「えっ」

と、問い返した。

「死というのは我々にとっては大変な事態やけど、川端さんにとって死なんて、たいした問題やないんや。こちらから、ふっ、とあちらへいくという感じや。常人の我々には分らんや」

春とはいえ深更の鳴滝は冷やりとしている。風が赤松林を揺らす。保田は蹲踞の姿勢で煙草をくゆらしながら

御簾の掛かった窓越しに遠くへまなざしを注いだままでいた。半白の頭髮が湿気をおびて怒髪のように逆立っている。堅い髪である。

「あつちとこつちを、行ったり来たり、川端さんはできる人やつたんや」

保田が言葉を重ねた。

川端が、死を突き抜けている、という保田の言葉は納得できた。『十六歳の日記』を読んでおれば解かる。孤児といわれる川端だが、現世の人でもあの世の人でもない川端の姿が浮かぶ。生死を超越した地点に川端はいた、という思いが保田の言葉から彷彿させられた。と同時に、

「佛界易入 魔界難入」

と、川端が好んで書いた書の意味が解かる気がした。何かが感覚に訴えてくる。言語にできない何かである。

「佛界易入と魔界難入という言葉が、川端さんが我々に遺こさばった言葉やなあ」

と、保田はいった。

「佛界易入 魔界難入」は一休禪師の言葉である。川端はそれを未完の小説『たんぼ』の中で使っている。一九六八年度ノーベル賞受賞講演（十二月十二日、スウェーデン・アカデミー）での『美しい日本の私―その序説』にも引用している。川端が愛した言葉である。佛界と魔界、生と死、正気と狂気、存在と無、といった言葉がこの語から湧き立っている。保田は人間が生きる上で遭遇するこれらの苦悩に川端の生き様を見ているようだった。

保田は川端から「佛界易入 魔界難入」の書二枚を贈られ持っていた。川端自筆の書である。縦長の大きな白紙一枚に「佛界易入」、同じ大きさの一枚に「魔界難入」と墨痕鮮やかに書いてある。筆者は後日にこの書を見た

が、川端の細々とした体つきからは考えられない力の強い、堂々とした書だった。いまは保田の妻、典子が所持している。典子の話だと、二枚の書を保田が一枚にしてくれるように表装屋に依頼し、現在は四角な大きな一枚にしつらえられている。向かって右が「佛界易入」の四文字、左が「魔界難入」の四文字である。それぞれの文字は上から二字ずつ横並びにある。「佛と魔」「界と界」「易と難」「入と入」であるが、同じ二字が横に並ぶ「界」と「入」でも、文字の筆の動きと趣きは異なり、一枚四文字だけの書より重みと深みが増した気分がある。それに「佛界易入」「魔界難入」と一行書きより、横並びの方が気迫が届く。「佛と魔」「易と難」は字が対句的になって、深淵な意味でも問いかけられている風である。

先にこの八文字は小説『たんぼぼ』に出てくると書いた。『たんぼぼ』は川端最後の小説である。『眠れる美女』『片腕』の後に書かれた同系統の作品で、眼前の体の一部が突然見えなくなる「身体欠視症」という現実にはない奇病にかかった稲子という女性と、稲子の母、稲子の恋人の久野によって話が展開する。物語が母と久野の対話でほとんどが進行するかつての川端の小説に見られない作りである。話は「身体欠視症」の奇病にかかった稲子が、母と久野につきそわれて、たんぼぼの花咲くのどかな生田町の精神病院に入院させられる情景から始まるが、不思議なことに川端は、この中で稲子と母と久野と医者以外に、たった一人だけ老人を登場させて、「佛界易入 魔界難入」という言葉と関係ある人物に設定している。入院している西山老人である。小説全体の中で西山老人の描写に割かれている行数は少ないが、西山老人が始終書き散らしている文字が「佛界易入 魔界難入」なのである。川端は次のように書いている（ここに引用する文には現在から考えて不適切な言葉が使用されているが、筆者の川端が故人であって訂正できないことと、『たんぼぼ』が人間の救いを根源に置いた文学的価値の高い小説であること、さらに原

文を尊重する意味からそのまま記述する。引用は『川端康成全集第十五巻』昭和四十八年九月三十日、新潮社刊を用いた。

たとへば、病院の主のやうな西山老人は、本堂の疊に紙をひろげて大きい字を、よく書いてゐる。白い日本紙や唐紙が、この老狂人の手にさうはいらないので、古新聞紙に書いてゐることが多い。（佛界易入 魔界難入）書く字はたいいていこの八字である。西山老人自身はこれを、

「佛界、入りやすく、魔界、入りがたし。」と讀んでゐる。老人は白内障で目が霞んでゐるが、その書は力がある。俗氣、匠氣がない。しかし、狂氣はあるか。騒がしい字ではなく、氣ちがひらしい字でもないが、よく見てゐると、狂氣あるひは魔氣がひそんでゐさうには思へる。西山老人は人生のある時に、魔界にはいらうとつとめて、魔界にはいりがたかつた、その痛恨が、狂つた老後の字にもあらはれるのかもしれない。

西山老人の「魔界」とはどのやうなものであつたか、とにかく、人生のある時にその「魔界」にはいらうとしたねがひは、彼を狂はせたほどの痛ましさではあつたのだらう。西山老人は氣ちがひ病院を魔界だなどとは考へてゐない。魔界にようはいれなかつた人たちの避難所、休息所といふほどにも考へてゐないだらう。

西山老人のこの描写は、小説の本筋と直接関係のない精神病院内の一情景であつて、小説の中でどんな役割をはたすのか、『たんぼぼ』が未完なので分からない。ほかの入院患者が登場してゐないところからすると、かなりな重要人物になる予定だったと思える。

西山老人はどこか作者、川端と重なっていて、川端がみずからを西山老人に比定して自分の内面を語らせる人物に設定したと考へても齟齬をきたさない人物である。川端は西山老人に何を語らせようとしたのか。興味津々だが物語が途中で切れているので分からないということは先に述べた。精神病院に入院した稲子と西山老人との

かわりの描写が川端の書きたかったことを示唆しているように思われるので、次に引用する。

稲子は聲がきれいだから、老人をよろこばせるだらうか。しかし、をかしなことがおこるかもしれない。人體欲視症の稲子は、西山老人のからだに全く見えなくて、ただ、筆が動いて（佛界易入魔界難入）と字を書くのが見える。そんなことがないとはかぎらぬ。そして、稲子に老人の姿が見えないで、筆と字とだけが見えると、老人にわかれば、あるひは西山老人は、今こそ自分が魔界にはいれたと、欣喜勇躍するのではないだらうか。いや、西山老人の「魔界」とは、そんなまやさしいものでないかもしれない。しかし、精神の老衰につれて、西山老人の魔界も老衰してゐるかもしれない。若い娘の稲子によつて、たわいなく魔界にみちびかれてゆくかもしれない。もうそれは、そこにはいりがたくて氣が狂ふといふほどの魔界ではないかもしれない。

川端は、物語の筋に則するというより「魔界」の正体を懸命に考えている文である。西山老人も稲子も「魔界」探求の道具立てになつていて、『たんぼぼ』の主題のひとつが「魔界難入」の探求だと思える書き方である。

「佛界易入 魔界難入」の書は一休禅師の自筆が残っていて、川端が所持しているという。川端は余程、この書に魅入られていたようだ。ところが、一休のこの書を取り上げた『美しい日本の私―その序説』で、川端は一言も一休の筆致について触れていない。ノーベル賞の授賞記念講演なので観客の多くが外国人であり、東洋的な書の話をしても分かりにくいことと、講演内容が書と関係のない文化論であることから話さなかったとも考えられるが、書は筆遣いが価値を持つ。川端が山田寺の碑文字の貫名海屋と、桜井市文化会館に掲げられた梶木掬水の書を欲しがった理由も筆致にあった。一休の書の筆遣いに一言触れてよいと思うが、ない。川端が「佛界易入 魔

「佛界難入」の書で筆致に触れているのは、『たんぼぼ』の西山老人の書く字についてくらいである。「佛界難入 魔界難入」の書に限って川端は、その筆致より言葉の意味内容に強く捉われていたふしがある。川端は西山老人の筆致を次のように書く。

その書は力がある。俗氣、匠氣がない。しかし、狂氣はあるか。騒がしい字ではなく、氣ちがひらしい字でもないが、よく見てみると、狂氣あるひは魔氣がひそんでゐさうには思へる。

ここでの筆致に対する評は、小説の記述だから川端が作り上げた空想の筆致と考えられなくもないが、一休の書を持つ川端がその書を眼前に置いて、このくだりを書かなかったとはちょっと考えにくい。眼前に置かなかつたとしても一休の書が頭にあつて当然である。参考にはしたはずだ。筆者が一休の書を見たわけではないので断定はできないが、一休の書でなかつたとしても、叙述の元になつた書があつたに違いない。それはどんな書なのか。川端みずからが揮毫した書か。川端の書に一休の書を合わせて、それぞれの特徴を取り上げて叙述したのか。考えられるのは一休の書、川端の書、二人の混交の書の三通りである。仮に一休の書か、川端自身の書を参考にしたのなら、いま挙げた引用文の内容にあるように、二人はともに魔界に入っていないことになる。魔界がひそんでいる段階である。

川端は「佛界易入 魔界難入」という書に限っては、筆致よりも言葉の内容に異常に拘つていた。川端の関心の焦点はひとえに「魔界」にあつたといえる。

川端が「佛界易入 魔界難入」の言葉を最初に用いた小説は『たんぼぼ』である。『たんぼぼ』は『新潮』昭和三十一年六月号、及び四十二年二月号より四十一年二月号（うち二回休載）と、四十二年十一月号より四十三年十月

号（同二回休載）の発表だから、昭和三、四十年ごろには、川端は「佛界易入 魔界難入」の言葉に捉われていたと考えられる。この後、『美しい日本の私―その序説』（ノーベル賞受賞記念講演、昭和四十三年十二月十六日新聞各紙に発表）の文中に使って、「佛界易入 魔界難入」の意味を言及する。『美しい日本の私―その序説』の該当する文は次の内容である。

私も一休の書を二幅所蔵してゐます。その一幅は、「佛界入り易く、魔界入り難し。」と一行書きです。私はこの言葉に惹かれますから、自分でもよくこの言葉を揮毫します。意味はいろいろに讀まれ、またむづかしく考へれば限りがないでせうが「佛界入り易し」につづけて「魔界入り難し」と言ひ加へた、その禪の一休が私の胸に來ます。究極は眞・善・美を目ざす藝術家にも「魔界入り難し」の願ひ、恐れ、祈りに通ふ思ひが、表にあらはれ、あるひは裏にひそむのは、運命の必然でありませう。「魔界」なくして「佛界」はありません。そして「魔界」に入る方がむづかしいのです。心弱くてできることはありません。

逢^{ヘバ}佛^{ニセ}殺^ヲ 逢^{ヘバ}祖^{ニセ}殺^ヲ祖

これはよく知られた禪語ですが、他力本願と自力本願とに佛教の宗派を分けると、勿論自力の禪宗にはこのやうに激しくきびしい言葉もあるわけです。他力本願の眞宗の親鸞（一一七三―一二六二）の「善人往生す。いはんや惡人をや。」も、一休の「佛界」「魔界」と通ふ心もありますが、行きがちがふ心もあります。その親鸞も「弟子一人持たず候」と言つてゐます。「祖に逢へば祖を殺し」、「弟子一人持たず」は、また藝術の嚴烈な運命でありませう。

『美しい日本の私―その序説』の「佛界易入 魔界難入」の文も、川端が魔界に入つた印象はなく、読み取れる

のは魔界への憧れである。晩年の川端は魔界に憧れ、魔界に入って、魔界を表現したかったと考えられる。川端の興味は魔界だけにあった。しかし、魔界を表現する前に川端は自ら命を絶った。まさに魔界難入である。

一休が魔界に入っていたかどうかは知らないが、川端にして入れなかった魔界とはいかなる世界なのか。『美しい日本の私―その序説』から謎を解く手がかりを探すと、「藝術の厳烈な運命でありませう」という一文に当たる。芸術の持つ厳しい孤独感とそこに広がる狂気の顔が覗く言葉である。本人以外の誰にも理解できない孤独と狂気にこそ芸術が開く。画家、ゴッホの例を挙げれば瞭然だろう。芸術の運命は芸術家の狂気である。一休の魔界も狂気である。魔界も狂気も中身に大差はない。狂気を含む世界が魔界ともいえる。川端は「厳烈な運命」にぶら下がっている魔界に到達しかけていた。生と死の境目をひょいと飛び越えて行き来できる川端の到達点こそが魔界の入口ではなかったか。川端は魔界の存在を確実に覚知し、魔界の入口から魔界を覗き込もうとしていたが、見えなかったのではないか。存在するが簡単に見えない世界が魔界だろう。

『たんぼ』に描かれた「人体欠視症」の稲子は、眼前に存在している人間の体が見えない。全盲の人のすべてのものが見えない状況とは異なる。見る能力はあるのに見えない。見えそうで見えない。見たいが見えない。確実に存在しているのに目で確認できない状態である。

存在とはいったい何なのか。ひょっとすると川端は、魔界の淵から手を突っ込んで何かに触れたのではないか。それは存在の本質であったかもしれない。人の生死などちっぽけな問題にすぎなくする何かである。「人生に起こることなどたかが知れている」といっていた川端が、初めてぶち当たった「たかが知れていないもの」だったとも思える。背筋の凍るような、恐るべき世界である。かつて日本の作家が立てなかった地点に川端は立っていた

と考えるのである。

七

保田は川端のいる地点がどこなのか知っているようだった。しかし、

「我々には分からん所に先生はいやはった」

と、ひとりごちるようにいった。「川端さん」ではなく「先生」と尊敬をこめた物言いだった。まなざしは小倉山の三日の月に注いだままである。

後日、筆者は電話で、川端のいた所がどこなのか保田に聞いたが、保田は、

「川端さんの話はせんことにしたのや。僕が墓場へ持ってゆく」

と、以前と同じ返事をした。

「少し聞かせていただいているのですが」

と食い下がると、

「君もその話を墓場に持っていってくれるか。それなら近く桜井へ帰る用事があるので、奈良でおうて話をしようか」

と、意外にあっさりと約束ができた。

川端の周囲で起こっている世俗の問題や噂話を含めて、それら一切と川端の死は関係ないという話になるはず

だった。筆者はその片鱗を保田から聞いていたつもりだったが、全容は知らない。保田は、小説の『事故のてんまつ』やそのほかの川端に関する噂話などは些事であって、「そんなことで川端さんは死なない」といつていた。筆者の推測では、保田は文学関係者や世間の知らない話を川端から直接、聞いていた。聞いたのは奈良の山の辺の道を散歩した一月二十一日である。保田は、それを語るまいとする風があった。保田は何を知っていたのか。下世話な話だが、知りたいのが人間の欲望でもある。

後に筆者は、昭和四十七年六月二十日に新潮社から発行された『新潮六月臨時増刊号川端康成読本』に掲載された五味康祐の「魔界」に関係ある話かと考えた。「魔界」は川端がある若い女性と関係があり、それをネタに男が川端に脅しをかけていた、という話である。内容は衝撃的である。川端がこの問題を苦にして自殺したとしてもおかしくはない気がした。それに「魔界」は権威も伝統もある新潮社から刊行されている日本の代表的な文学雑誌『新潮』に掲載された。作者の五味も有名な作家である。眉唾のいい加減な内容のものを掲載するはずがない。一流の出版社と作家が、川端の死後までもない時期に衝撃的といつていい内容を持つ文を掲載したのだから、自信のある作品で内容の真実性も高く、出版関係者や編集者などの間では半ば公然と語られていた噂話ではなかったか。それを五味が真実味を持たせて書いたのだらうと思った。その「魔界」に関係ある何かを保田は知っているとな筆者は考えたのである。

むしろ全面的に「魔界」を信じ、信頼したわけではない。不審もあった。「魔界」の書き方や構成が、どこかすつきりせず、事実を記したものか、それとも虚構なのか、はつきりしないからだった。虚構なら、これほど馬鹿馬鹿しい愚作はないし、事実なら、なぜ小説形式にしたのか不思議である。それほど思わせぶりなのである。

すべてを信じたいという疑念を抱かせるのが「魔界」だった。発表当時は、品が下がるのか、いやらしい、などの評価もあったようだが、そのあたりはどうなのだろうか。それを保田に聞いたかった。保田は真実を知っているはずだった。

そのため、筆者は保田が口にしたいろいろな言葉を推測したり、質してみたりしたが、結局は筆者の邪推だという考えに終わった。「魔界」に書かれている話は川端の自殺に結びつく明確な証拠はなかった。その状況はあっても川端が自殺する動機に直結しなかった。もし「魔界」を作品として扱って批評するなら、致命的な欠陥はそこにある。描かれた内容が確実に川端の自殺と結びついて始めて、この作品のテーマが成立するからである。

では、保田は何を胸の裡に秘めていたのか。筆者は、保田に面会をしてそれを聞き出そうとした。

保田との面会はこの年の四月か五月の約束だった。しかし、筆者から保田への連絡が遅れて六月も下旬にずれ込んだ。あるいは、七月に入っていたかもしれない。この辺りの記憶はやや曖昧である。いずれの時に保田に電話を入れると、保田は「背中が痛いので会えん」といった。声は元気だったが、つらそうな響きがあった。

「運動不足とか肩凝りですか」

と問うと、保田は、

「ようわからんのや」

といった。電話はそこで終わった。面会の約束は取り付けられなかった。

それから数ヵ月後、保田の死が伝えられた。十月四日昼前、保田は肺ガンで不帰の客となった。煙草をひっきりなしに吸っていた人だから、仕方がない死因と思えた。と同時に川端の話が聞けなくなったことに無念を感じ

た。保田が「墓場へ持っていく」といっていた話は、完全に消滅したのである。

筆者は、保田が胸の裡に持っていたであろう話の内容を推測できなくはないが、それはあくまでも推測であり、筆者がいくら確信していても口にすれば誤る可能性が高い。この話からは撤退する以外に手はない。

ただ、保田が、川端は芸術家が達すべきある地点に達していて、それを話すと何か問題が起こる、と考えていたことは確かである。あるいは、それが死につながる問題だったのかもしれない。だから保田は口を閉ざしたのだろう。また、それを話してもた易く誰もが理解できるとは思えない、と保田は考えていたふしがある。保田が、それは世間に流布している川端の噂話に類したものではなく、

「もっと怖い芸術の話や」

と、筆者に語ったことがあるからである。

そのことが川端の自殺に関係がある、とはいわなかったが、それに触れたからには死んで当然、といった趣旨も口にした。

世間のみならず、ありふれた人間には理解できない話である。それを懇切丁寧に説明しても、結局は話に憶測や尾ひれがついて人の間を徘徊する。世間はそんなものだった。

「世間はいえばいさほどおかしくなる」

とも保田はいっていた。だから口を閉ざした。その荷をひとりで負うてこの世を去ったのだとしか筆者には考えられなかった。

保田のこの態度からいえることはひとつである。保田が胸に秘めていた話は、芸術に関係ある話とはいえ人の

生命を抹殺する力を持つ、ということである。筆者はそれが川端の芸術というなら、川端が固執した一休か、それとも「仏界易入 魔界難入」の書、あるいはこの言葉の意味に関係ある話かと保田に問うたが、それかどうか保田は言明しなかった。電話口に出た時の保田は、川端に関しては片鱗も話すまいという姿勢が感じ取れた。保田が以前に筆者に会うと約束したのは、筆者が保田の胸にしまわれている話のほんの一部分を知っているといったからだだったが、保田はそれに対しても何の言及もしなかった。筆者に何事かを言及すれば話の片鱗が分かるということがあり得る。それを避けたともいえる。筆者には多分、あの話だろうという思いはあるが、それもぼんやりと外郭を眺めているだけの話だった。確実性はない。

誤解を恐れずに、筆者がぼんやりと眺めている外郭の話を書こう。それは保田が口にした次のような話である。「人の死は、心不全とか何かとかが原因で死ぬものやと考えられているけれど、肉体的だけの原因で人は死ぬものやない。精神的な原因でも死ぬのや。心臓が停まったから人は死んだというが、精神的な原因で人が死んだのかどうか分からんで。自殺というのも医学的な見地であって、それは残った者が見ている人の死の形にすぎん。われわれは明治以来、人間を肉体と精神の二つに分けて考え、死はその一方の肉体の観点だけから判断するようになったけれど、人間は肉体と精神と別々に生きているわけやない。その二つをともに生きている。そやから肉体だけで死を判断するのはおかしいのや」

ここに掲げた話は、保田の語った趣旨である。細部にわたって正確に保田の言葉を再現したわけではない。また、保田がこう語ったのは、筆者が川端の死について、一つ一つ問いかけていった末である。その問いかけというのは、たとえば、川端は山の辺の道で自分の墓石の話をしたが、当時、川端が死の覚悟をしていてそんな話を

したのか、といった内容である。保田は筆者のそうした問いかけの数々をすべて否定した後で、なりゆきから語ったのがいま記した話である。先に述べたようにこれは趣旨だが、筆者は正確に聞き取ったと考えている。むろん筆者がこの話に衝撃を受けた記憶があるので、気分が動揺していて部分的に保田の発した言葉がとんでいるかもしれないが、趣旨は間違いない。筆者にいうことは、川端が到達したところはいま書いた話になんらかの關係があり、それが川端の死につながっている、ということである。

保田が亡くなって平成十四年で二十一年になる。川端が亡くなって三十年である。この一人の評論家と一人の作家が共有しているものは、川端が到達した地点から得られた何かだった。それを知る保田も自身が十分に理解できる何かであった。その何かは川端個人のものではなく、文学、あるいは芸術の究極にある人間の秘密に触れる重大な何かだった。それだからこそ保田が誤解を恐れて口を閉ざしたに相違ない、と筆者は考えている。

参考文献

- | | |
|---------|---------|
| 川端康成全集 | 新潮社 |
| 落下流水 | 新潮社 |
| 天授の子 | 新潮社 |
| 竹の声桃の花 | 新潮社 |
| 骨拾い掌の小説 | ゆまにて |
| 眠れる美女 | 新潮社 |
| 海の火祭 | 毎日新聞社 |
| 一章一花 | 講談社文芸文庫 |

たんぼ

伝記川端康成

川端康成の世界

川端康成とともに

川端康成点描

「新潮」川端康成読本昭和47年6月号

川端康成その人とふるさと

川端康成その人とふるさと 挿話編

川端康成展図録

没後20年川端康成展図録

保田與重郎選集

冰魂記

桜井ふるさと散歩

川端康成 瞳の伝説

川端康成 精神医学者による作品分析

論考 川端康成

現代のエスプリ

瀧の音 懐旧の川端康成

川端康成 大阪茨木時代と青春書簡集

事故のてんまつ

川端康成「魔界」の書

川端康成の魔界

川端康成

進藤純孝

川嶋 至

川端秀子

澤野久雄

講談社文芸文庫

六興出版

講談社

新潮社

実業の日本社

新潮社

茨木市

茨木市

神奈川近代文学館

日本近代文学館

講談社

恒文社

ビレッジプレス

PHP研究所

中央公論社

筑摩書房

至文堂

恒文社

和泉選書

筑摩書房

芸術新聞社

有精堂

川端康成 芸術と病理

稲村 博

金剛出版

川端康成

古谷綱武

三笠書房

川端康成《その人・その故郷》

婦人と暮しの会

川端康成論考 増補版

長谷川泉

明治書院

文芸読本 川端康成

河出書房新社

群像 昭和四十七年六月特大号

講談社

文学界 昭和四十七年六月号

文藝春秋

文藝春秋 昭和四十七年六月号

文藝春秋

茨木高校百年史

茨木高校史編纂委員会

中世風狂の詩 一休「狂雲集」精読抄

蔭木英雄

思文閣出版

阿弥陀如来

望月信成

学生社

唐招提寺への道

東山魁夷

新潮社

日本の古代遺跡7 奈良飛鳥

保育社

日本書紀

日本古典文学大系

岩波書店

古事記

日本古典文学大系

岩波書店

記紀歌謡集

日本古典文学大系

岩波書店

記紀歌謡集

武田祐吉校註

岩波文庫

上宮聖徳法王帝説

花山信勝、家永三郎校訳

岩波文庫

日本及日本人 平成9年盛夏号

日本及日本人

新潮日本文学大辞典

新潮社

日本史年表

歴史学研究会編

岩波書店

桜井市・記紀万葉歌碑所在図

桜井市

奈良

なら・シルクロード博覧会編

奈良

日本交通公社

このほか、朝日、毎日、奈良新聞を参考にした。また、茨木市の川端康成文学館と奈良の飛鳥資料館、桜井市に資料の提供、及び、助言をいただいた。